



お

と

め

く

ず

し

OTOME♥SLAVE

ひげなむち

〇月△日

今日から突然、私に家庭教師がつく事になった。
(真菜ちゃんに夢中になりすぎて)下降気味の成績を
心配した母がどこからか手配してきたみたい。
名前は宗像和哉…そう、なんと男性。
…ありえない。母は一体何を考えているのか。

…まあ、客観的に見れば彼は礼儀正しく明朗快活。
世間一般で言う好青年の部類に入るとは思う。
私に対しても、特に不審な振る舞いは無い。
…けど、それでも彼は『男』。決して油断はできない。

ごめんね真菜ちゃん。
なんとかして、さっさとこんな男は追い出しちゃうから。

〇月×日

彼…宗像和哉が私の家庭教師になって一週間。
敵意丸出しの私に対して、彼は相変わらずだった。不自然すぎる。

今日、その理由を聞いてみた所(ちなみにコレが初会話だった)
彼は私の男嫌いの事をすでに母から聞いていたらしい。
そして頼まれていたそうだ。
『娘の男嫌いをなんとか治してやってほしい』と。
…冗談じゃない。そんな事を企んでいたなんて。
母に、そして目の前の男に対して怒り心頭の私へ
彼はさらに意外な言葉を投げかけてきた。

『僕個人は、そのままで良いと思うんだけどね』

虚を突かれた私へ、いつも通りの穏やかさで彼は続けた。
個人の趣味嗜好は人それぞれなこと。
人を好きになるという事の素晴らしさ。
一方で、女性同士がパートナーとなる事の社会的なリスク。
……両親の気持ち。心配。

『納得も、従う必要もないけれど…理解くらいはしてあげよう？』
『その上で、皆でうまくやっていく方向を模索すべきだと思うんだ』

…反論は出来なかった。自分でも解っていた事だったからだ。

『…うん。やっぱりキミは頭がいい』

うつむき黙り込む私の頭を、彼はポンポンと軽く叩いた。
…無言でカー杯払い除けたけど。

そんな私の態度も苦笑で流し、
言うだけ言った彼はあっさり帰っていった。
わかった風な事を……腹立たしい…けれど。

『……』

机の上、目の前にはまだ暖かなコーヒー。
毎回彼がいらてくるが、これまで一滴も飲む気にならず
無駄になっていたもの。

…なんとなく、今日はそれを飲んでみようという気には、なった。

…甘かった。やっぱりわずかでも気を許すべきじゃなかった。
 コーヒーに何か入っていたのか…昨日の晩、あれから
 不自然なほどすぐに眠りに落ち…

起きた時には、すでに彼…宗像に、貫かれていた。

眼を覚ましたとき、目前には、あの男の顔があった。
 そして目下には、深く深く繋がった互いの性器があった。
 混乱する私へ、宗像はいつもの穏やかな口調でささやきかける。
 『静かにしないと、愛しの真菜ちゃんにこの事を…ね?』
 その一言で私の反撃は封じられた。

陳腐で、使い古された……つまりはとても効果的な手段。脅迫。
 ……私は黙って男の突き込みを受け続けるじかなかった。

真菜ちゃんのための唇が。
 真菜ちゃんのためのおっぱいが。
 真菜ちゃんのためのあそびが。
 乱暴に犯される。無遠慮に貪られる。
 唾液を、体液を塗りこめられていく。
 悔しくて、惨めで、下腹部からこみ上げてくる
 ゾクゾクとした敗北感に打ちのめされて。
 それでも心は折れない。折らせない。
 意地と怒りを強く強く握り締め、
 目の前のケダモノの顔を精一杯睨み付ける。
 ……けれど、そんな顔をできたのも数瞬の間だけだった。
 お腹の中に、これまで体験したことのない感覚が起こる。

射精だった。
 私は、あの男の射精を受けてしまった。

身体の内へ、びゅっびゅっと浴びせられる熱い何か。
 じわり、じわりと得体の知れないものが染みこんでいく。
 だめだ、と思った。これは、この行為だけは許してはいけなかった。
 決定的な一線をこの男と越えてしまったという確信があった。
 真菜ちゃんとでは…女性同士では決して越えられない一線だ。

精液に満たされ、腰奥から湧き上がってくる充足感。
 精液に押し流され、今までの自分が消えてしまうような失墜感。
 圧倒される体感に私は怯えきり
 あられも無い声をあげて目の前のものにしがみつくしかなかった。
 その暖かで揺ぎ無いもの…宗像の大きな肉体は、
 身も世も無く震えあがる私をしっかりと抱きしめ支え続けた。
 下半身ではしつこく、濃厚な液体を私へと送り込みながら…

それから深夜にかけて、私は都合五回精子を注ぎ込まれた。
 みっともなく悶え、泣き、怯える私に対し宗像は全く容赦が無かった。

あの日から数日が経ち、今日、またあの男がやってくる。
 ……楽しみなわけがない。あんな風に弄ばれて、怒りは煮えたぎっている。
 そして正直に言えば……怯えてもいる。宗像に。何より自分に。
 子宮で微かに感じる、うずきと飢え。

……真菜ちゃん、わたしは…



そのときの私は、心の底から男というものに溺れていた。



子宮を押されるたびに、腰の奥から歓びが広がった。
耐え切れず、声をもらす。

男性器に押し出される自分の声は、とてもいやらしかった。
もっと声を出したくて全身が男に媚びていく。

膣口はたくましい受精管を食い締め、膣肉が雄肉にすがりつき、
子宮は精子と亀頭を迎えにどんどん降りていく。

男を求める女の浅ましさを、それを感じ興奮してしまう。
自身を貪る雄に反応し、私の身体は受精したかっているのだ。
真菜ちゃんとの行為では知り得なかった、雌としての機能だった。

『それじゃあ、あとは…』

『そうだ、俺と付き合ってくれる？』

『……はい』

ついでのように問われた交際申し込みに、
私はさりとて応えてしまっていた。

直後に事の重大さに気付いたが、気だるい快感に
意識が溶け崩れて訂正する気がどうしても起きない。
脳裏に真菜ちゃんの実顔も浮かぶが
彼のストロークを受けるたびにそれも遠くなっていく。

『(後で…改めて断れば…いいかな…)』

『(それよりも…今は…)』

この快感に浸っていたい。
早く射精を受け、精液の味に酔い痴れたかった。

『…ありがとう。咲。これからよろしくね』

射精が、始まった。

ぴったり奥までハマりこんだ性器から、
さらにその奥へとねっとりした感触が這入りこんで来る。
熱くて、重くて、卑猥で危険な液体が、びゅうびゅうと大量に。
待ちかねたモノで満たされる感触と実感に、全身が震えた。
気持ちよくて気持ちよくてたまらなかった。

射精はとても長く、その間私はみっともなく声をあげ続けた。
即物的な愛情に満たされ、動物的な情動に身を任せるのは
とてつもない快感だった。

……全てが終わり、今こうして私は日記を書いている。
その傍らには彼…宗像さんが寝ている。結構居汚い。
憎むべき男。卑怯極まりない犯罪者。
けれどももう…上手く憎むことができない。
怒りは下腹におだかまる精熱で溶けて消えてしまっていた。
本当に…自分の馬鹿さ加減にため息しか出ない。

これからどうしよう。真菜ちゃんの事とか。
私、彼女と別れたくないんだけど…

今日は二つ、わかった事があった。
一つは、宗像さんが…単なるダメ人間だったということ。
もう一つは、私も…かなりのダメ人間だったということ。

『どっちとも付き合っていったらいいじゃん』

虚を付かれた私に、いつも通りの穏やかさで彼は語った。
個人の趣味嗜好は人それぞれなこと。
人を好きになるという事の素晴らしさ。
一方で、二股を続ける事の社会的なリスク…とかは語らなかったけど。

…とはいえ、それしかないかなあ…と私も思っただけなんだ。
強欲で、浅ましくて、自分勝手都合の良すぎる話ではある。
けれど…どちらも切り捨てられなければ、結局はそういう事になる。
真菜ちゃんと別れるという選択は無い。
彼女が私の全て。別れるくらいなら死んだ方がマシ。
そして宗像さんと別れるという選択も…
この時の私には取れなかった。

こんな相談をしながら、彼のおちんちんを一生懸命頼張っていれば当然だった。

舌の上に感じる圧倒的な重量感、口腔全体で感じる熱感、
鼻に抜ける雄臭さ、味覚を刺激する苦味。
それら全てが私の情欲をあおる。
こんなステキなモノをもう手放せるわけがない。
そう思った。夢中だった。

唇をすぼめて先端とキスをする。
しずくを舐め取り、そのまま愛しさと日頃の感謝を込めて裏筋に沿ってキスの雨を降らせていく。
袋にまで至ったら今度は大きく伸ばした舌全体をパツタリと密着させてゆっくりと舐めあげる。
ニニしばらくで宗像さんに教えられたテクニク。

『とにかく俺のちんぽとイチチャイチャするつもりで』
とは彼の言葉。

続った。というかごく自然にそうできた。
 あれからほぼ毎日のように私を貫き、啼かせ、
 二ね回し、めちやくちやにしてくれたおちんちんだ。
 もはや愛情を通り越して敬愛の念すら芽生えかけている。

伸ばした舌でたふたふと玉袋と遊びながら
亀頭を手のひらでぐりぐり擦り回していると
彼が両目を細めて腰を震わせた。

『っ…咲、そろそろ射精るよ…』





『……(んちゃ)』

その言葉を聞いて、私は真正面から先端に吸い付いた。
亀頭すら咥えこまない。唇を尖らせ、わずかに開いた口から
ちゅちゅと鈴口を吸い上げる。
先ほどのキスと似た感じだけど、そのまま動かずに正面キープ。
そして彼の幹を両手で出来る限り包み込むように握り
そのままカー杯しごきあげていく。

……おま○この、つもりだった。
口が子宮で、唇で子宮口、両手が膣だ。
その日はまだ一度も犯されておらず
下腹部から感じる切なさ私が私にそうさせた。

彼はその事に気付いたと思う。人が悪そうな笑みを浮かべて…
……いつも以上に盛大な射精を行った。

びゅるっ びゅくっ びゅっ びゅくっ びゅーっ
『んぶっ』

口の中にいやらしい白濁が飛び込んでくる。
熱く生臭い粘液により、わずかに数秒で私の口は…
つまり私の擬似子宮は膨らみきり、満たされてしまった。

本物の子宮も、射精を受けるたびに
こうやって拡張されていたのだろうか。
想像してひどく昂奮してしまう。

その昂奮のままに、私は必死に精液を飲み下していった。

…数分後、私はお腹からポカポカと温まり、
うっとり彼の股間に顔をうずめて息をついていた。
腰が痺れている。足に力が入らない。もうメロメロだった。

『……どうやら結論は出たかな?』

彼の言葉にも観念してうなづく。

『よかった。じゃあ今度、俺にも真菜ちゃんの事紹介してね?
三人で仲良くやっていこう?』

…これにもうなづいた。半ば予想すらしていた。
宗像さんはきっと、真菜ちゃんの事も食べてしまうつもりだ。
そして私も…真菜ちゃんを食べて欲しいと思い始めていた。

このたくましい雄から注ぎ込まれる
おびたしい多幸感、充実感、背徳感……快感。
私一人だけが味わうのはもったいないと感じていた。
ぜひともかわいい彼女にも味わって欲しかった。
大好きな真菜ちゃんと、この幸せを共有したかった。

真菜ちゃんとお尻を並べ、あるいは重なりあって、
宗像さんから順番に犯される。同時に犯される。
そんな淫ら極まりない未来を想うと胸が高鳴ってしまう。
その生殖行為の行き着く先を想うと子宮がうずいて仕方ない。

真菜ちゃん、ごめんなさい。私は本当にダメ人間です。
…彼によって、ダメにさせられてしまったようです…



お買上げ
ありがとうございました!

2013.11. ひげなむち